

ホストによるカフェレポート

ホスト せんだいメディアテーク
ゲスト 天野真弓 (PFFスカラシッププロデューサー)

いつのころからかよく聞くようになった「プロデューサー」という肩書き。とはいえ、アーティストやイベントの影に隠れて本当のところはよくわからない、偉そうな人?というくらい。ましてや映画の世界では「監督」や「役者」が先に立って、プロデューサーの名前をよく見ている人はあまりいないでしょう。今回のゲストである天野真弓さんは、そんな映画プロデューサーのなかでも特に表舞台には出てこない人のひとりです。

PFFスカラシップという、新人監督の初商業作品をプロデュースし続けている天野さんは、これまで、才能あふれる監督たちのデビュー作に携わる仕事として黒子に徹してきたとのことで、今回はじめてその仕事の裏側にふれるにあたり、ひとつひとつのステップについて言葉を選びながらお話していただきました。監督とはいってもプロのスタッフと仕事をするのははじめての彼/彼女らと一緒に脚本を考え、決して十分ではない予算のなかで撮影現場に立ち会う様子は、新しい才能に伴走する人としてのプロデューサーの姿を想像させました。

ホスト せんだいメディアテーク 小川直人



カフェ研からのコメント

力強いコク、かるやかなベルベット、ほのかな酸味、いずれもスタジオ・レクチャーで提供されたコーヒーの味を表現した言葉です。コーヒーと言っても千差万別、様々な個性を持っています。「プロデューサーとして監督の個性を殺さないようにしている」とは、今回のレクチャーゲスト、天野さんの言葉です。天野さんは監督の個性を引き出すために、じっくりと監督と向き合い、対話をして作品と一緒につくっていきます。個性豊かなコーヒーの香りに包まれながら、天野さんの映画作りに対する強い気持ちを感じられるカフェでした。

マスターによるカフェレポート

ホスト 杜の都を本の都にする会
ゲスト 南陀楼綾繁
(なんだろうあやしげ・ライター、編集者)

「本との出会い」を伝え、考えていく『杜の都を本の都にする会』を6月に立ち上げました。会の紹介と、実際に本に出会ってからおうということで、イベント『Book! Book! Sendai 古本市』を10月に企画しました。

期間中は、いろいろな出会いがあって、とても充実していましたが、中でも、goban tube cafe で開催した『ナンダロウさんと本の話しよう』は、とても楽しく、学ぶことの多いイベントでした。

ナンダロウさんは、上野で「一箱古本市」を発売した方で、古本のことはもちろん、街のイベントという意味においても、いろいろと経験のある方です。イベントは、和やかな雰囲気が進み、心と街に、響く言葉がありました。来場した方たちが、メモをとる場面が多かったのも、印象に残りました。

goban tube cafe の向こうに、街が広がっています。そこには、それぞれの暮らしがあって、街の地図があって、本棚がある...そんなことを想う夜でした。

マスター 武田こうじ (詩人)



カフェ研からのコメント

「なんだろうあやしげ」という珍奇なニックネームのおじさんは、古書店主のような風情で現れ、テーブルにつくとあっという間に、テーブルの上が古本で埋まってしまいました。仙台の恒例行事になるのではと期待の広がる「Book!Book!Sendai」。街の古本市にどういった人たちがどういう関わり方をしているのか、他地域でのユニークな開催方法などお話しをきくことができました。

goban tube cafeは、こうした活動の紹介など、いま街なかに生まれつつある、新たな文化活動の情報をお届けする場として機能しています。

マスターによるカフェレポート

ホスト せんだいメディアテーク
ゲスト 畠山敏 (畠山敏デザイン事務所)
鎌田雅宏 (鎌田建築設計事務所)

「おやじカフェ」はアートだ。

「おやじカフェ」。やってみたら、マスターとゲストのいい歳のおやじが3人で2時間ただ座って時間をつぶす、そんな事になったらどうしようと心配しておりましたが、30名以上のお客様をお迎えできてマスターとして本当に胸をなでおろしています。

河北新報の記事のキャッチコピー「説教させてよ」はそれを聞きたい人間があって初めて出来ることであり、聞きたくない人にとってはただのノイズでしかありません。その回の「おやじカフェ」は話をしたいおやじと、聞きたい、そして思いを口にしたいお客との一体感がありました。その一体感は2時間という時を駆け足ですこせました。

アートという行為がコミュニケーションをとるという事だとしたら、コンピューターのディスプレイの上で文字のやりとりをする事ではなく、フェイスtoフェイスという事がやっぱりコミュニケーションの原点なのだと感じさせた「おやじカフェ」は、ひとつのアートの空間をメディアテークの5番チューブに作りだしたといえるのでは、とマスターとして実感することができました。

マスター 尾崎行彦 (画家・版画家)



カフェ研からのコメント

おやじと言えば屋台のほうがびったりくるし、おでんもラーメンも、もちろんアルコールもなしのカフェに、おやじと話しにいくってどんな感じかなあ、と私たちも心配してました。そしたら、なんと当日はたくさんの若者が3人のおやじたちをそれぞれにとりかかこみ、コーヒーを手に、熱くて、深いやりとりが始まったのです。自然にできた3つの人垣はまるで屋台村のよう(やっぱり?)。それはともかく、おやじでもおかんでも、屋台でもカフェでもなんでもいい! 要するにこんな場所が作りたかったんだと実感しました。
・・・おやじに脱帽。